様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年５月１１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18592341
研究課題名（和文）遷延性意識障害患者における活動性の向上を目的にした簡易栄養評価指標の開発
研究課題名（英文）Development of patient with prolonged disturbance of consciousness simple nourishment evaluation index

研究代表者
日高　紀久江（HIDAKA KIKUE）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授
研究者番号：00361353

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：遷延性意識障害，経管栄養，栄養状態，評価指標

１．研究計画の概要

本研究は，遷延性意識障害患者の中でも特に診療頻度の少ない在宅や施設等の患者の低栄養が懸念されるため，時間に制限のある訪問看護師や施設において評価可能な簡易な栄養評価指標の開発を目的としている．

研究計画は，第一の研究として，意識障害患者における二次的合併症発症に影響する要因を検討すること，そして第二に遷延性意識障害者の栄養摂取カロリーの調整による栄養状態の変化について介入研究を行う予定である．そして，これらの結果をもとに，経管栄養を行なっている遷延性意識障害者における簡易な栄養評価指標の開発を試みることを計画している．

２．研究の進捗状況

平成 18 年～20 年にかけて，経管栄養をおこなっている遷延性意識障害者に関する介入研究を実施した．意識障害者の間接熱量測定や，筋肉および皮下脂肪厚などから栄養状態を経時的に評価して栄養摂取カロリーの調整を行った．積極的にリハビリテーションを行なっていた患者であったが，体力の消耗や肺炎・褥瘡などの合併症を発症することなく経過した．事例分析であるものの，リハビリテーションを開始前には栄養摂取カロリー量を少し増やし，その後は活動量や体重の変化，そして筋量や皮下脂肪厚などを相対的に評価することで，合併症の発症予防の可能性が示唆された．また，本研究を実施した中で，自動的な運動のほとんどない弛緩性麻痺の意識障害者においても，他動的に運動を行なった結果，筋肉量の増加が認められた．リハビリテーション開始から３週目に，皮下脂肪厚が減少し，骨格筋量の増加がみられたが，骨格筋量の増加は基礎代謝量に影響することから，今後の研究として新たな課題を見出すことができた．

３．現在までの達成度
④遅れている。

第二の介入研究はほぼ終了しているが，第一の研究の実施が倫理委員会の申請に関する問題により遅れているため，④と評価した．研究の遂行上の問題を少しでも早く解決し，研究を実施したいと考えている．

４．今後の研究の推進方策

前述した状況であり，研究の遂行に関しては今年度中に成果を出せるよう努力する所存である．また，今年度はデータ収集を行いながら，同時にこれまでの研究成果のまとめを行う予定である．

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）